

## 鍼灸治療



# 不妊症・多嚢胞性卵巣症候群

奈良市 登美ヶ丘治療院 院長

野口 創

### ■ 症例

患者：27才女性，事務職，身長158cm，体重49kg

初診日：2000年12月中旬

主訴：不妊症

既往歴：なし

西洋医学的診断：多嚢胞性卵巣症候群，不妊症

舌脈：舌色：やや暗色，舌苔：薄白，脈象：やや弦細

その他：月経不順（遅れやすい），月経前に下腹部が張る，経血の色は暗い（時々月経血にレバー状の血の塊が含まれる），月経痛（+），睡眠（-），大便（時々軟便），尿（少），食欲（-），稀に食後に吐き気がする，時々頭痛が起こる（両側側頭部に痛みが起こるが，左側の痛みが強い），肩こり，汗（-），仕事でのストレスが大きい。

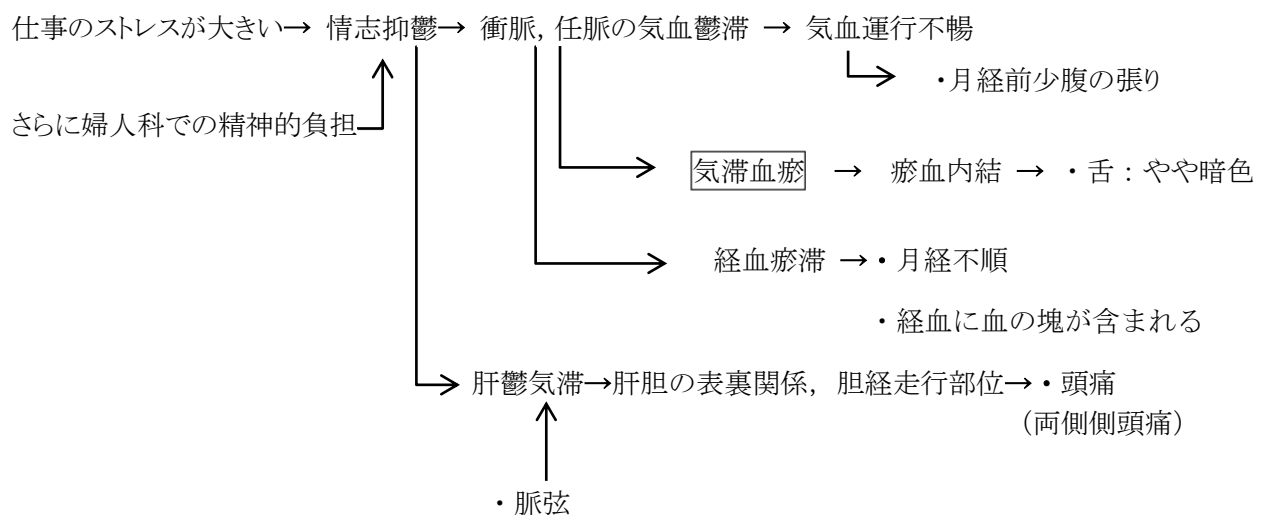
以前から，月経血量は少なく，時々軽度の目眩が起こる，下半身が冷えやすい，疲れやすい等の症状がある。

西洋医学的所見・中医学的所見：結婚以前から，月経血量が少なく，時々軽度の目眩が起こる，下半身が冷えやすい，疲れやすい等の症状があった。結婚後は，仕事上での精神的ストレスが重なり，仕事と家庭の両立で肉体的な疲れも溜まる。結婚後すぐから子づくりを計画していたが，4年近く経っても妊娠に至らず，月経不順（遅れやすい）等も，気になっていたので婦人科を受診（2000年5月）。婦人科では，月経不順や不妊は「多嚢胞性卵巣症候群」が原因であると診断された。排卵が上手く行われていないうえ，ホルモンバランスも悪

と説明を受けたが、何よりも根本的な治療法がないということが大きな精神的な負担になった。2000年6月から、婦人科での不妊治療（排卵誘剤等の使用）を始める。半年間の婦人科での不妊治療でもなかなか妊娠に至らず。2000年12月、当院を受診。

2001年1月からは、排卵誘発剤などの婦人科で処方される薬の副作用（のぼせる等）が服用回数を重ねるごとに強くなるので服用をやめ、婦人科での治療を完全に中止。

### 弁証分析①



弁証①：気滞血瘀

治則①：活血化瘀

取穴①：・間使（泻法）——行気散滞  
 ・三陰交（先に泻法，後に補法）—活血祛瘀，生新血  
 ・归来（泻法）——瘀滞消散

### 針灸方法①

毫針（日本針，直径0.18mm×針長40mm）を用いて，間使・归来・三陰交に刺針し，間使・归来には，得気させ捻転による泻法手技を行う。その後，10分おきに3回，泻法手技を行う。

三陰交には，得気させ，捻転による泻法手技を行った後，5分間の間隔を空け，

捻転による補法手技を5分、その後、20分間置針。

置針中は、遠赤外線温熱器で腹部を温める。

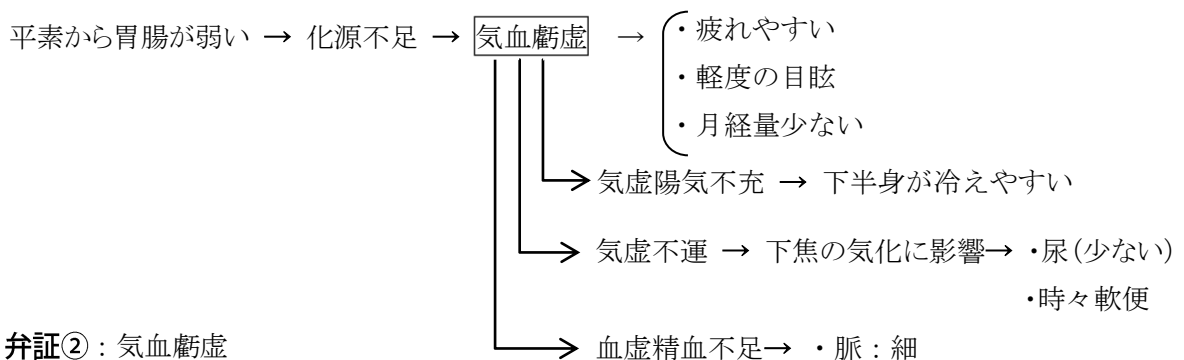
治療間隔は、1週間に2回治療（2~3日に1回）。

### 治療経過①

初めの4回までは、日本針を用いたが、針の刺激にも慣れてきた様子だったので、5回目から中国針へ変更。毫針（中国針、直径0.25mm×針長40mm）を用いて、上記と同様の針灸方法で治療を行う。治療間隔は、週に2回の治療を合計24回（3カ月）行った。

3ヶ月の治療を経て、4回目の月経時には、月経前の下腹部の張り、月経血にレバー状の血の塊はみられなくなり、経血の色が赤く鮮明な色に変化してきた。月経痛も少しあるものの、軽減。そこで、針灸処方を本治的なものに切り替えることにした。

### 弁証分析②



弁証②：気血虧虚

治則②：気血双補

・舌苔：薄白

取穴②：・合谷（補法）——補気  
 ・三陰交（補法）——補血  
 ・归来（泻法）——活血散滞

### 針灸方法②

毫針（中国針、直径0.25mm×針長40mm）を用いて、合谷・三陰交に刺針し、捻転による補法手技を5分行う。その後、30分間置針。

毫針（日本針、直径0.18mm×針長40mm）を用いて、归来に刺針し、得気さ

せ捻転による泻法手技を行う。その後、10分おきに3回、泻法手技を行う。

置針中は、遠赤外線温熱器で腹部を温める。

治療間隔は、1週間に1回治療で継続治療。

## 治療経過②

針灸方法①で、瘀血症状がかなり軽減したため、泻法治療から補法治療へ変更し、本治的治療を始めた。

平素から、陽虚にまで至らないものの、気血不足の症状が明らかに認められたため、気血双補を中心に進めた。泻法治療と違い、補法の治療は、時間がかかるという内容の説明をし、コツコツと治療を継続した。2002年3月まで約1年間、治療を続けていたが、約1年ぶりに月経周期が遅れたので婦人科を受診すると妊娠が判明。

2002年11月 無事に元気な男子を出産（当時30才）。

## ■解説

今回の不妊症患者の場合は、中医学的に分析すると、頭痛、肩こり、月経が遅れる、生理痛が強い、月経血にレバー状の血の塊が含まれるなどの瘀血症状から「気滞血瘀」と診断した。治療では、弁証に基づき、「活血化瘀」の治療から始めた。まず標治法の部分である、瘀血を取り除き、衝脈、任脈の気血の流れを改善することを優先した。

その後、経絡の気血の流れを阻害している原因である瘀血症状が改善されてからは、「病を治すには、必ず本を求む。」(治病求本)の考えに基づき、本治法へ治療の方向を変更し、「気血虧虚」を改善するため、気血を補充する治療を行った。

## ■まとめ

多嚢胞性卵巣症候群では、全く排卵しなくなってしまう場合、時々、排卵する場合、月経周期が延びてしまう場合、黄体機能不全になる場合、など症状は様々であり、どの症状をとっても不妊に直結する大きな問題である。

今回の患者のケースでは、帰来などへの刺針により、現代医学で言うところの、骨盤底の血行を促進させた。新鮮な血液が十分に卵巣や子宮や付属器に行き渡るようにすることで、ホルモンバランスを改善し、妊娠しやすい状態を保つ、卵巣の機能を向上させ、質の高い卵子を育てる、受精卵の着床を安定させる、などの効果が得られ、無事に妊娠に至れ

たとえる。その後も、患者の体調は安定し、現在は、3児の母親になっている。

\*出典：2003年に北京で行われた「中日韓血瘀証及活血化瘀研究学術大会」における発表原稿を日本語に翻訳して転載した。